

興福寺跡出土将棋駒の樹種

鈴木 一 議

福田 さよ子

清水 康 二

小 栗 明 彦

目 次

I. はじめに	75
II. 出土将棋駒の概要	75
III. 出土将棋駒の樹種	78
IV. まとめ	80

論 文 要 旨

奈良県立橿原考古学研究所が、1992・2013 年度に興福寺跡で実施した発掘調査において、平安時代の将棋駒が出土している。

1992 年度調査出土駒は、「天喜六年（1058）」銘の木簡と共伴することから、現状で日本最古の将棋駒群と位置付けられている。2013 年度調査出土駒の多くは、「承德二年（1098）」銘の木簡と共伴し、そのなかで平安時代の「酔象」駒の实在が確認された。これら、興福寺跡出土将棋駒の樹種については、これまで明らかとなっていなかったが、今回の分析により、その使用樹種を明らかにすることができた。

これら、日本最古級の将棋駒群の使用樹種が明らかになったことは、将棋駒の使用樹種の選択性を考える上で、重要な成果と位置付けることができる。

鈴木 一議（すずき かずよし）

奈良県立橿原考古学研究所 主任研究員

福田 さよ子（ふくだ さよこ）

奈良県立橿原考古学研究所 共同研究員

清水 康二（しみず やすじ）

奈良県立橿原考古学研究所 指導研究員

小栗 明彦（おぐり あきひこ）

奈良県立橿原考古学研究所 指導研究員

I. はじめに

興福寺跡¹⁾では、奈良県立橿原考古学研究所が1992年度と2013年度に実施した発掘調査²⁾において、平安時代の将棋駒が出土している。これら、出土将棋駒の内容については、既に発掘調査報告書等でその内容が報告されている(清水・小栗1993、清水・小栗・和田1994、鈴木編2017、鈴木2017)。

しかし、1992年度調査出土将棋駒については、樹種同定を目的に一部の駒の試料採取がおこなわれていたが、その結果は報告されていなかった。また、2013年度調査出土将棋駒については、発掘調査報告書のなかでその内容を報告するとともに、赤外線写真を掲載したが、実測図を掲載することができなかったことに加え、樹種同定をおこなうことが叶わなかった。

よって、本稿では、2013年度調査出土将棋駒の実測図を掲載するとともに、1992・2013年度調査出土将棋駒の樹種同定結果について報告する。

(鈴木)

II. 出土将棋駒の概要

まず、今回の対象資料である1992・2013年度調査で出土した将棋駒の概要について確認する。

(1) 1992年度調査³⁾

調査地は、平城京左京三条七坊に位置する興福寺の北側、北面築地付近にあたり(図1)、宝永五年(1708)の『興福寺伽藍春日社境内絵図』などから、江戸時代には子院である吉祥院が所在していたことがわかる(太田編1969)。発掘調査は、奈良県文化会館の改築工事に伴っておこなわれた(図2)。

検出遺構は、井戸状遺構のみである。井戸状遺構は、堆積層の状況などから、井戸掘方を廃棄土坑に転用した可能性がある。井戸状遺構の堆積層のうち黒褐色粘質土層(6層)から、廃棄されたとみられる木製品や土器等とともに将棋駒が出土している。

出土した将棋駒は15点で、「玉将」3点(図3—1～3)、「金将」4点(図3—4～7)、「銀将」1点(図3—8)、「桂馬」1点(図3—9)、「歩兵」5点(図3—10～14)、不明1点(図3—15)である。そのほかに、「歩兵」と記した木簡(図3—16)や「歩兵」・「金

将」・「酔像」などの将棋駒名がみられる習書木簡(図3—17)、平安時代の年号である天喜六年(1058)銘をもつ題籤軸(図3—18)などがある(表1)。

これらは、すべて井戸状遺構6層からの出土であり、共伴する紀年銘木簡の存在から、出土将棋駒は平安時代のもので、現状で日本最古の将棋駒群と位置付けられている。加えて、共伴する習書木簡中に「酔像」の文字が認められることから、これまで鎌倉時代の鎌倉大将棋や室町時代の中将棋の駒として知られていた「酔像」駒が(佐伯2002)、平安時代に使用されていたことが想定されるとともに、「酔象」以外に大型将棋関連の資料が出土しなかったことから、『二中歴』に記載のある平安時代の2種類の将棋以外に、「38枚制酔象将棋」が存在した可能性が指摘された(木村2001)。

このように、1992年度調査における将棋駒の出土は、これまでの日本における将棋の起源や変遷に関する理解に大きな影響を与えるほど多くの情報をもたらした。

(清水・小栗)

(2) 2013年度調査⁴⁾

調査地は、興福寺の北東隅、東面築地の内側にあたり(図1)、『興福寺伽藍春日社境内絵図』などから、江戸時代には子院である観禪院が所在していたことがわかる(太田編1969)。発掘調査は、奈良公園バスターミナルの整備に伴っておこなわれた(図2)。

検出遺構は、奈良時代から明治時代の井戸や土坑などである。そのうち井戸SE01・03、土坑SK35から将棋駒が出土している。堆積層の状況などから、SE01・03は井戸から廃棄土坑への転用、SK35は井戸掘方を廃棄土坑に転用した可能性がある。

出土した将棋駒は12点で、「酔象」1点、「桂馬」1点、「香車」1点⁵⁾、「歩兵」6点、不明3点である。遺構別では、SE01から「香車」1点(図4—1)、SE03から「酔象」1点(図4—2)、「桂馬」1点(図4—3)、「歩兵」5点(図4—4～8)⁶⁾、不明3点(図4—10～12)、SK35から「歩兵」1点(図4—9)が出土している(表1)。そのほかに、SE03からは、平安時代の年号である承徳二年(1098)銘をもつ題籤軸(図4—13)が出土している。

各遺構の共伴遺物をみると、SE01・03は11世紀後

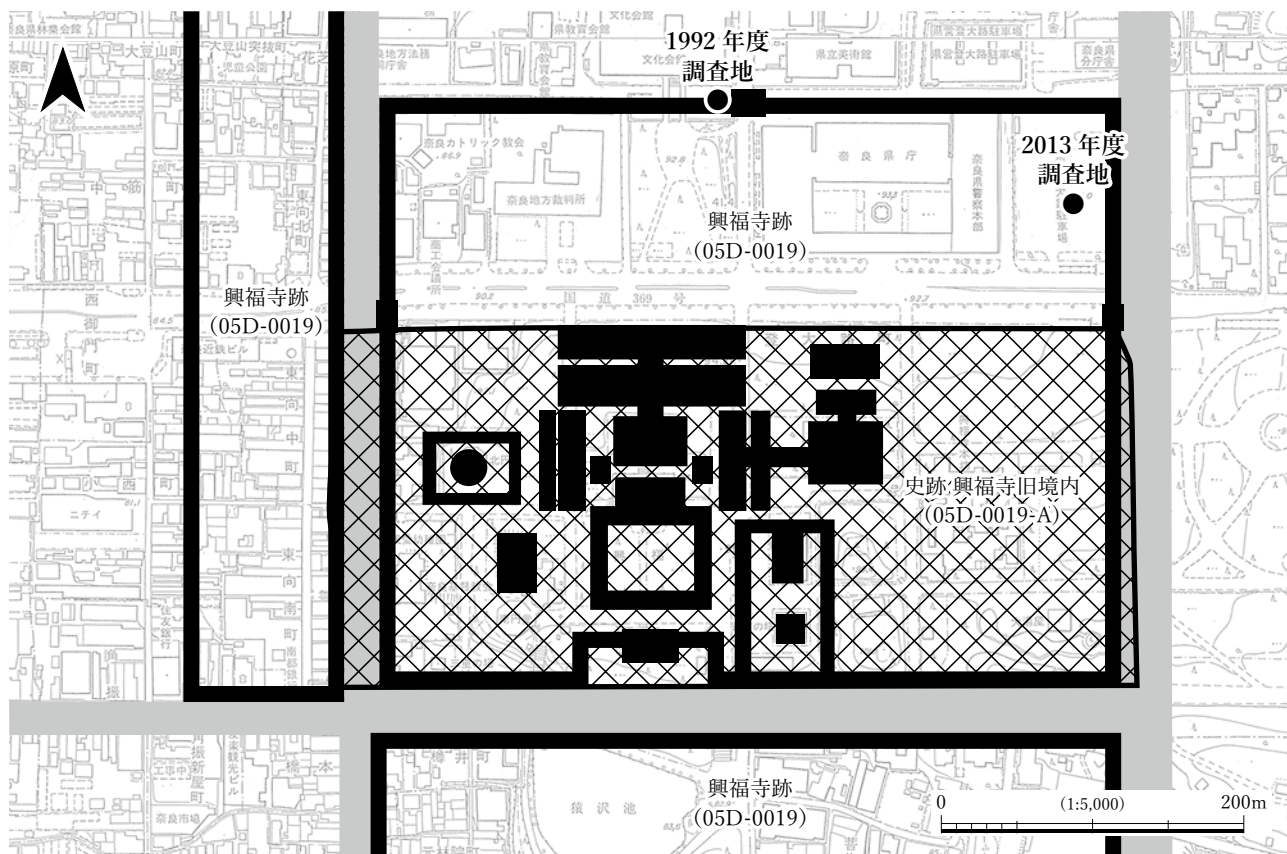


図1 調査位置図

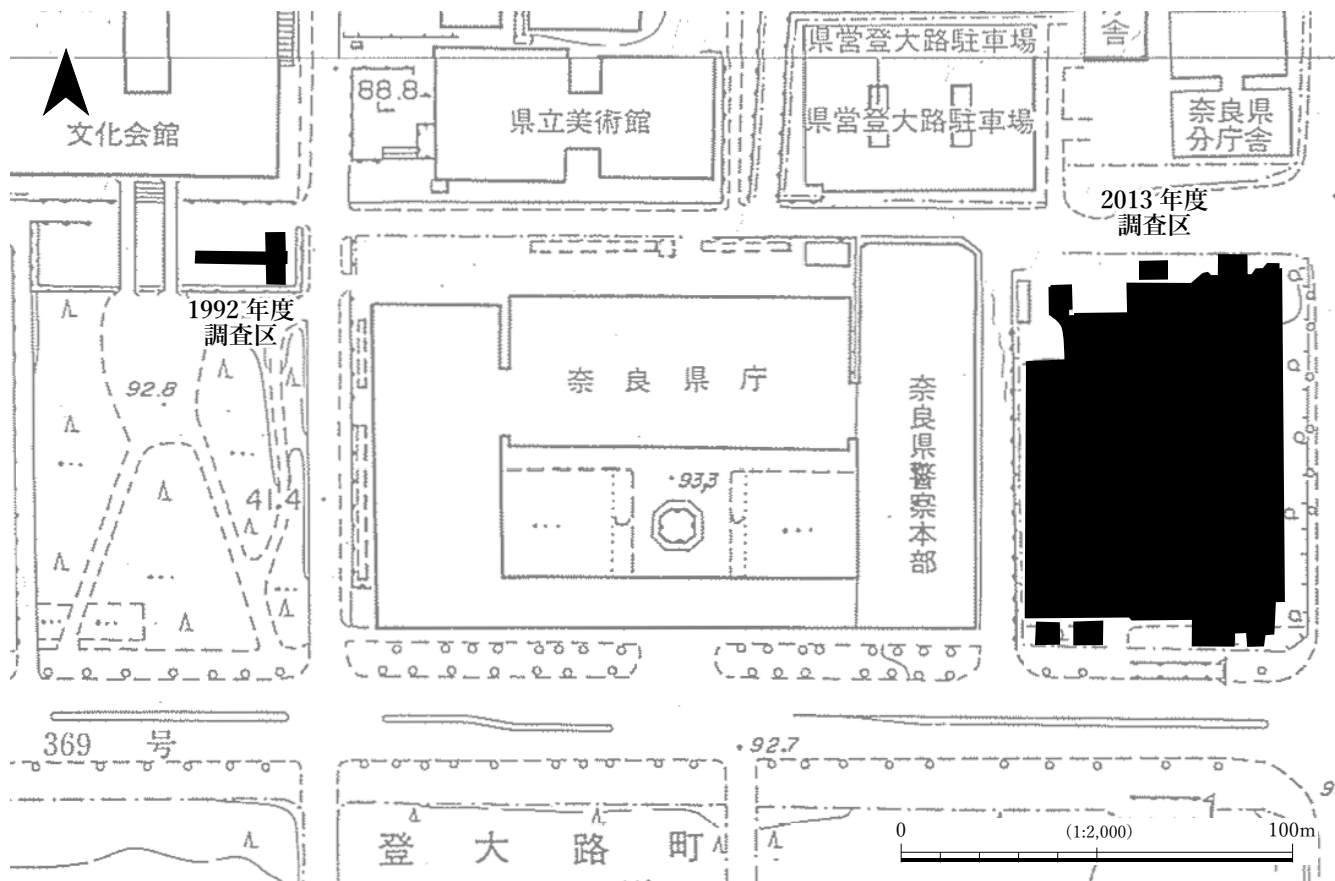


図2 調査区位置図

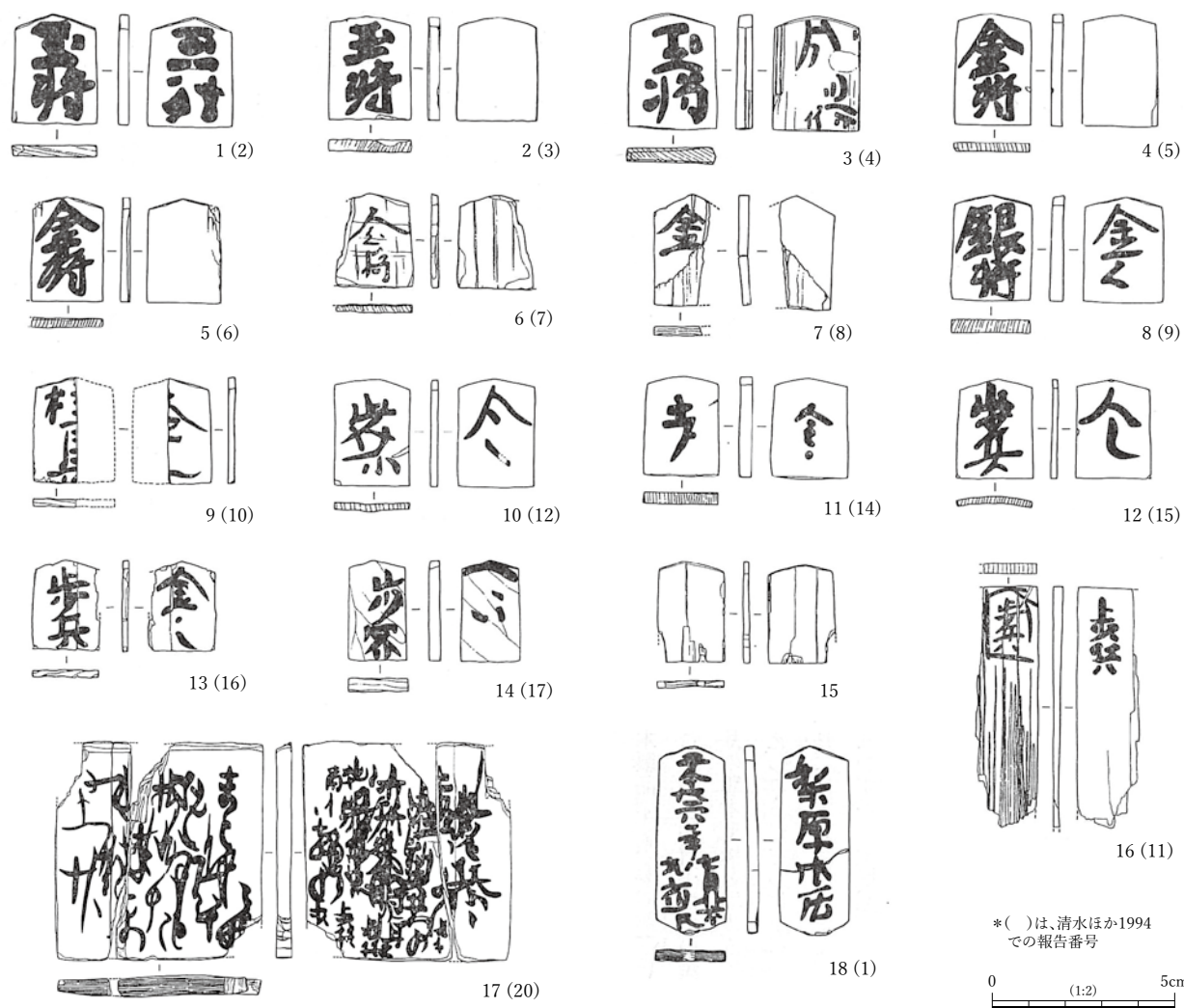


図3 1992年度調査出土将棋駒と関連木簡

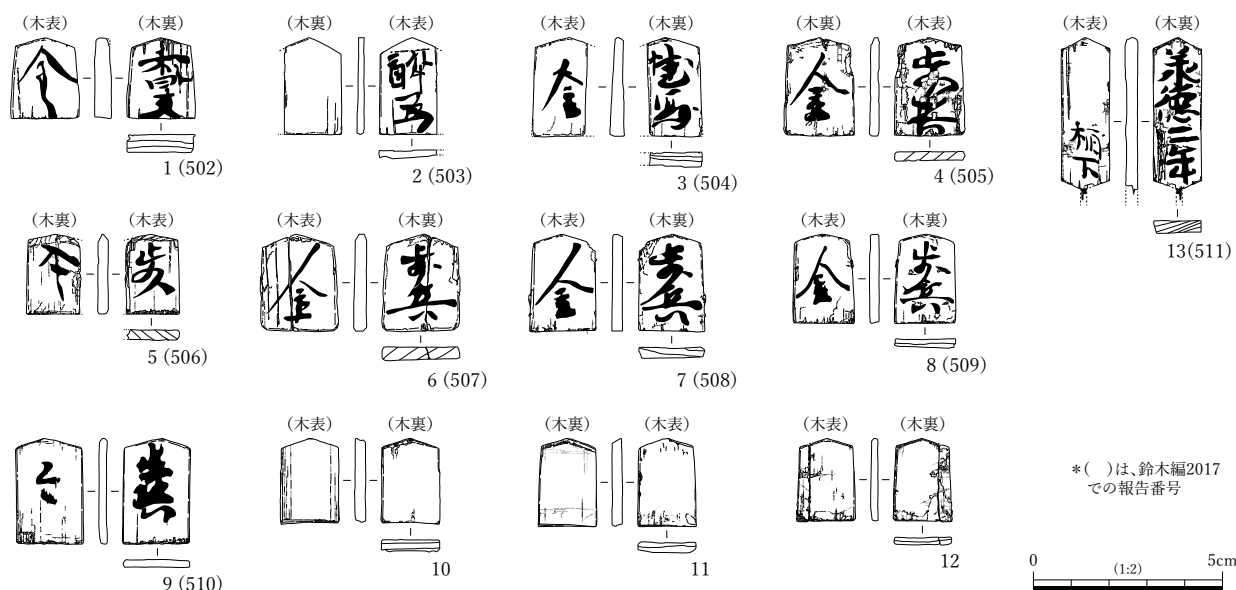


図4 2013年度調査出土将棋駒と関連木簡

表 1 出土将棋駒一覧

図	掲載 番号	報告 番号	遺構 / 層位	裏	内容	法量 (mm)			木取り	和名	樹種名 学名
						長さ	幅	厚さ			
3	1	2	井戸状遺構 / 6層	「玉将」	「玉将」	31	24	3	板目		
3	2	3	井戸状遺構 / 6層	「玉将」		29	23	3.5	柃目		
3	3	4	井戸状遺構 / 6層	「玉将」	「□〔成カ〕□」	33	24	5	板目		
3	4	5	井戸状遺構 / 6層	「金将」		31	20	3	柃目		
3	5	6	井戸状遺構 / 6層	「金将」		30	20	2	柃目		
3	6	7	井戸状遺構 / 6層	「金将」		30	20	3	柃目	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
3	7	8	井戸状遺構 / 6層	「金□〔将〕」		32	15	3	板目		
3	8	9	井戸状遺構 / 6層	「銀将」	「金□〔也カ〕」	30	21	4	柃目		
3	9	10	井戸状遺構 / 6層	「桂馬」	「金□〔也カ〕」	31 (12)		3	板目	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
3	10	12	井戸状遺構 / 6層	「歩兵」	「金」	31	21	2	柃目		
—	—	13	井戸状遺構 / 6層	「歩兵」	「金」	29	16	4	—		
3	11	14	井戸状遺構 / 6層	「歩」	「金・」	28	21	3.5	柃目		
3	12	15	井戸状遺構 / 6層	「歩兵」	「金」	28	20	2	柃目		
3	13	16	井戸状遺構 / 6層	「歩兵」	「金□〔将カ〕」	25	18	2	板目		
3	14	17	井戸状遺構 / 6層	「歩□」	「□〔金カ〕」	29	17	2	板目		
3	15	—	井戸状遺構 / 6層			28	18	2	板目	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
4	1	502	SE01/1～3層	「香車」	「金」	22	18	5	板目	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
4	2	503	SE03/8層西	「酔象」		26 (15)		2	板目	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
4	3	504	SE03/9・10層西	「桂馬」	「金」	26 (14)		4	板目	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
4	4	505	SE03/6層	「歩兵」	「金」	26	19	3	板目	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
4	5	506	SE03/8層東	「歩」	「金」	21 (14)		3	柃目	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
4	6	507	SE03/8層西	「歩兵」	「金」	25	21	4	板目	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
4	7	508	SE03/9層	「歩兵」	「金」	26	18	3	板目	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
4	8	509	SE03/8層西	「歩兵」	「金」	24	17	2	板目	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
4	9	510	SK35/6層	「歩兵」	「金」	28	18	2	柃目	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
4	10	—	SE03/7層			22	16	3	板目	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don.
4	11	—	SE03/9層			23	15	3	板目	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don.
4	12	—	SE03/12層西			22	15	2	板目	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.

凡例 ・掲載番号は、本稿での個体番号。報告番号は、図3は清水・小栗・和田1994、図4は鈴木編2017での個体番号。
・駒の内容および法量は、図3は清水・小栗・和田1994、図4は鈴木編2017による。なお、()の数値は、残存値を示す。
・木取りは、図3は実測図からの推定、図4は鈴木編2017による。

半～12世紀前半の土器類、さらにSE03では紀年銘木簡、SK35は12世紀中頃の土器類であることから、いずれも平安時代の将棋駒に位置付けられている。そのなかで、1992年度調査の成果から、平安時代にその存在の可能性が指摘されていた「酔象」駒の実在が証明され、「酔象」駒の裏面には文字が確認できないことから、鎌倉大将棋や中将棋での「酔象」駒とは異なり、成駒ではないことも明らかとなった。また、2013年度調査でも、「酔象」以外に大型将棋関連の資料が出土しなかったことから、「38枚制酔象将棋」が平安時代に存在した可能性がさらに高まった。

このように、2013年度調査における将棋駒の出土は、平安時代の将棋の実像に迫る新たな資料を提供した。

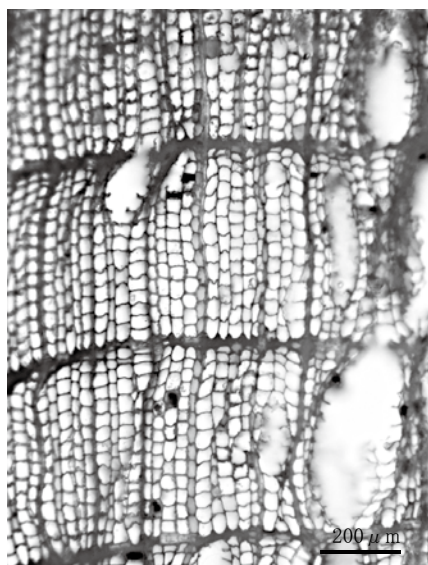
(鈴木)

III. 出土将棋駒の樹種

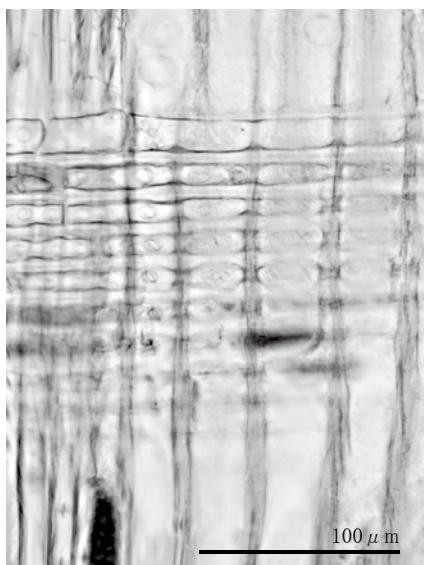
樹種同定は、1992年度調査の際に出土した将棋駒3点(図3—6・9・15)と、2013年度調査で出土した将棋駒12点(図4—1～12)、題籤軸(図4—13)の合計16点について実施した。試料作製には両刃の剃刀を使用し、各遺物から直接薄片を採取した。これをガムクロラルで封入してプレパラートに仕上げ、透過光の生物顕微鏡と落射蛍光顕微鏡下で組織の観察をおこなった。観察時には、島地他1982の記載や材鑑試料のプレパラートを参照した。

同定の結果は表1にまとめ、同定に至った樹種の特徴と観察結果を以下に記す。また、樹種の特徴が表れている顕微鏡写真を図5として掲載した。

〈ヒノキ〉*Chamaecyparis obtusa* Endl.



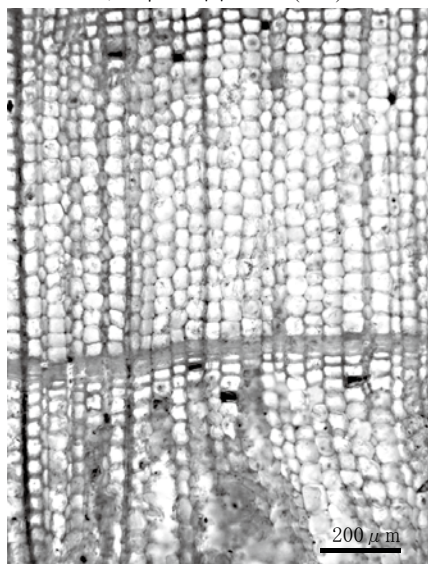
1. ヒノキ 木口 図4-1 (502) ×50



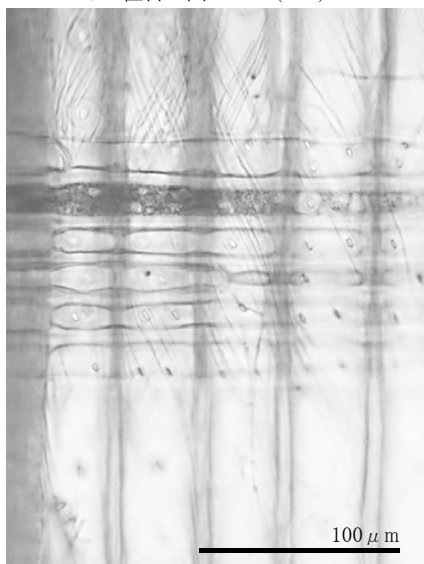
2. ヒノキ 柁目 図4-2 (503) ×250



3. ヒノキ 板目 図4-7 (508) ×50



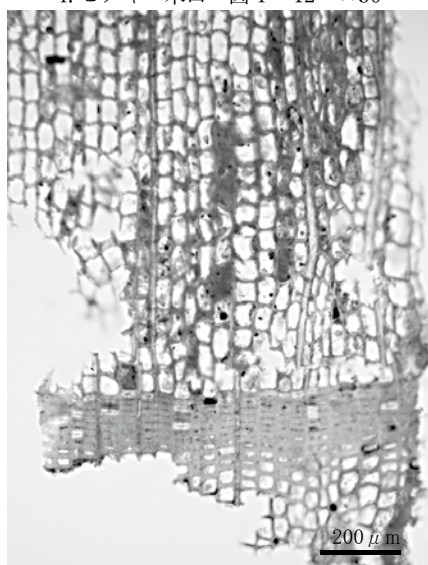
4. ヒノキ 木口 図4-12 ×50



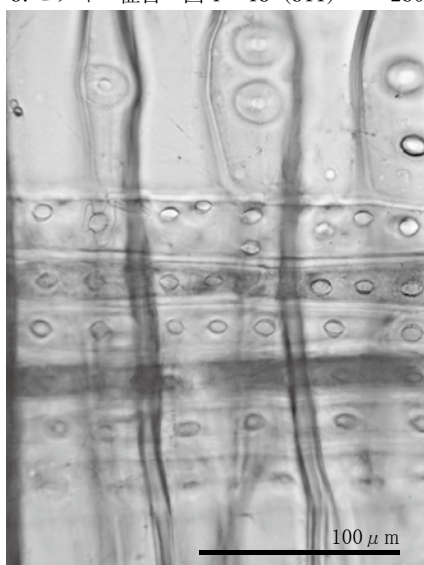
5. ヒノキ 柁目 図4-13 (511) ×250



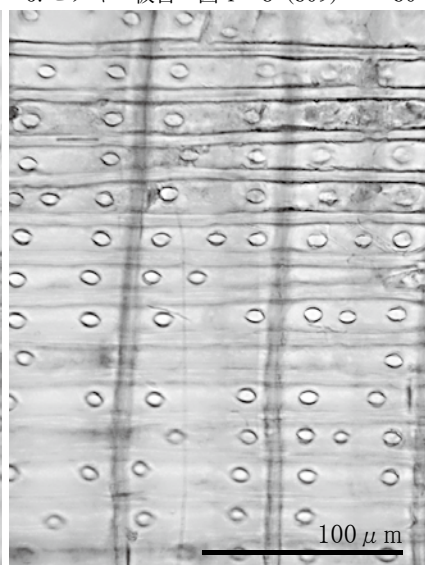
6. ヒノキ 板目 図4-8 (509) ×50



7. スギ 木口 図4-11 ×50



8. スギ 柁目 図4-12 ×250



9. スギ 柁目 図4-11 ×250

図5 出土将棋駒樹種顕微鏡写真

ヒノキ科 (Cupressaceae)

針葉樹。仮道管と樹脂細胞および放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行は緩やかで晩材部幅は狭いものが多い。樹脂細胞は、晩材部や晩材部近くの早材部に接線状に並ぶか点在する。分野壁孔はヒノキ型で1分野に2個(まれに3個)存在する。放射組織はほぼすべてが単列で、高さは1~20細胞高である。

〈スギ〉 *Cryptomeria japonica* D. Don

ヒノキ科 (Cupressaceae)

針葉樹。仮道管・樹脂細胞および放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はやや急で晩材幅は広く年輪界は明瞭である。樹脂細胞は晩材部の付近に散在または接線状に配列する。分野壁孔はスギ型で1分野にほぼ2個(まれに1~3個)存在する。放射組織は単列で、高いもので15細胞高くらいである。

1992年度調査の試料は、破損したもののみ扱ったが、腐朽の進行が著しく、分野壁孔の形を明瞭に把握できなかったが、晩材部幅が狭く均質な材であることなどから、ここではヒノキと同定した。2013年度調査の題籤軸(図4-13)については、ヒノキと同定した。

(福田)

IV. まとめ

今回、興福寺跡における1992・2013年度調査で出土した平安時代の将棋駒への使用樹種を明らかにすることができた。これら興福寺跡出土駒は、日本における最古級の将棋駒群であり、その使用樹種が明らかとなったことは、将棋駒への使用樹種の選択性を考える上で、重要な成果と位置付けることができる。

今回得られた興福寺跡出土将棋駒の樹種をもとに、今後、同時代および後の時代の出土将棋駒の使用樹種との比較・検討から、将棋駒の製作にかかわる使用樹種を選択性やその変遷等を明らかにしていきたい。

(鈴木)

註

- 1) 『奈良県遺跡地図 web』では、平城京左京三条七坊の南八坪分に当たる興福寺の中心伽藍部分を史跡 興福寺旧境内(05D-0019-A)、史跡範囲を含めた平城京左京三条七坊の南十二坪分および、同左京三条六坊の東四坪分、同左京四条七坊の北四坪町分を興福寺跡(05D-0019)とする。

本稿で取り上げる調査地点は興福寺跡にあたるため、『奈良県遺跡地図 web』に従い興福寺跡とする。

- 2) 以下、1992年度調査、2013年度調査とする。
- 3) 本項の記述は、特に断らない限り清水・小栗 1993、清水・小栗・和田 1994 による。
- 4) 本項の記述は、特に断らない限り鈴木編 2017、鈴木 2017 による。
- 5) 鈴木編 2017 および鈴木 2017 では、SK01 出土将棋駒について「歩兵」としていたが、「香車」の誤りである。ここに訂正したい。
- 6) 鈴木編 2017 および鈴木 2017 では、図4-7(508)の幅の数値に誤りがあった。ここに訂正したい。

引用・参考文献

- 太田博太郎編 1969『興福寺一』奈良六大寺大観第七巻 岩波書店
- 木村義徳 2001『持駒使用の謎—日本将棋の起源—』日本将棋連盟
- 佐伯真一 2002「平安から室町のさまざまな将棋」『日本文化としての将棋』三元社
- 島地 謙・伊東隆生 1982『図説 木材組織』地球社
- 清水康二・小栗明彦 1993「興福寺旧境内」『奈良県遺跡調査概報 1992年度』(第一分冊) 奈良県立橿原考古学研究所
- 清水康二・小栗明彦・和田 萃 1994「奈良・興福寺旧境内」『木簡研究』第16号 木簡学会
- 清水康二 2002「考古学から見た古代日本将棋」『日本文化としての将棋』三元社
- 鈴木一議編 2017『名勝 奈良公園・興福寺跡—興福寺子院観 禅院跡の調査—』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第122冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 鈴木一議 2017「奈良・奈良公園・興福寺跡」『木簡研究』第39号 木簡学会

挿図出典

- 図1・2 奈良市 1988『奈良市都市計画図』No.14・20をもとに筆者(鈴木)作成
- 図3 清水・小栗・和田 1994をもとに筆者(鈴木)作成
- 図4 筆者(鈴木)作成
- 図5 筆者(福田)作成